

中2で少年院／大学受験乗り越え

希望

この手に

沖繩の貧困・子どものいま

第1部 ⑦

非行 ⑦

シンナーもやった。仲間と吸って無茶が「高橋」(横な)とを忘れて優越感に浸れた。心臓はぼくぼくして、目の焦点は合わず、足元はぶらぶらした。でも、現在30代前半の女性にとって、現実逃避できるシンナーの魅力は大きく、受け付けば中毒になってしまう。

家にも学校にも関係所はない。心に寂しさを抱え、中学生になると家出を繰り返した。何カ月も友人や暴力団関係者の家を徘徊した。洋服も化粧品も必要なものは何でも万引で手に入れた。もらったシンナーを売り、年輪を偽って知人のスナックで働いた。稼いだお金でタクシーに乗り、外食やカラオケも楽しんだ。「人生で一番せいたくしていたかも」と振り返るほどだった。

シンナー、密蔵にバイクも走……。補遺は何十回と重なった。そして中2の時、つい

父の心「今なら」

子育て 幸せかみしめ

で退院した。同級生は高校生になっていった。

退院後も家計の厳しい状況は変わらず、16歳になるとすでにバイトを始めた。仕事は楽しく、それまでの「ヤンキーの世界」からは一変し、新天地が開けた。仕事に没頭する中、仕事仲間の男子高校生と親しくなり、彼の後を追うように高校や大学に挑戦した。

「少年院上がり」と蔑視する人たちがいた。そんなことを感じさせもせず、楽しんで付き合い、支えてくれたのが彼やバイト先の人たちだった。

「お世話になった人たちに迷惑を掛けられない。同じことは繰り返さない」と踏ん張り、大学受験も乗り越えた。

進学金を借り、目いっぱい

に安んずる時に送られた。月3〜3回の借金返済は必ず来てくれた。話したのとはわかない近況報告。手紙もくれたが「難しい漢字ばかりで読めない」と強めに言い込んだ。自由のない少年院生活は足りていなかった。「絶対には戻らない」と誓って1年半

働いて学費と生活費を出した。忙しかったが充実していた。20歳を過ぎ、父も少しづつ話ができるようになった。少年院時代でもつづいた手紙の趣味も分かるようになった。

そんな生活も、大学3年の父の病気が絶えずして2版ほど前の冬、父は亡くなった。



メモ 貧困と少年非行 沖繩少年院が2014年に発表した生育環境調査によると、13年度に仮退院した少年らのうち6割の家庭が生活保護レベルの貧困状態で、全員が保護者からの「暴力」「放任」を受けていた。調査した元コザ児童相談所長の山内優子さんは「貧困イコール非行ではないが、貧困は非行の一審大きな要因になる」と指摘し、貧困対策の重要性を訴えている。

「がくんと地に落ちたようだった」。女性は機中のつらいつらいつら支えてくれた男性に家庭を築いた。「自分のようなきみししい思いをさせたくない」と子育てに向き合い、「風かいお徳四やんが飯がある普通の毎日がある」と今の幸せをかみしめる。夫に何かあっても困らないよう正社員の仕事も得た。父からの手紙は、唯一の遺品として大切に保管している。

カレンダーに印を付けて面会を心待ちにしていること、苦しむ娘の気持ちに慰めをほせ困難を越えて進んでほしいと願っていること、手紙にうつられた、そんな父の気持ちには「大人目線で読めるかなら分かる。でも当時は全然分からなかった。その結果、女性には目を向けてもらえないという孤独感に苦しみ、父にも苦別を掛けた。

「反抗期の子どもは、親に言われたことを無視することもあるが、子どもは親に助けをほしいと思っっている。手紙でもメールでも、子どもに言葉を掛ければいい。世間の親たちに、そう願っている。」

(子どもの貧困取材班) (第1部終わり)